

「日本の埋没に危機感を」

勁草塾講演 寺島実郎さんが新年展望



大学生ら約200人が集まる中、2020年の日本を語った寺島さん

南区在住の元衆議院議員・齋藤勤氏が代表理事を務め、国内外の諸課題や平和について考える活動を行う一般財団法人「勁草塾」が2020年を展望する講演会を昨年12月19日に中区山下町の「ワークシア横浜」で開いた。一般財団法人「日本総合研究所」の会長で、TBSテレビ「サンデーモーニング」などに出演する寺島実郎さんが、経済指標などを基に

新年の日本と世界を展望。この中で寺島さんは「日本の埋没」と「危機感の欠如」をキーワードに、中国や韓国を念頭に「アジアダイナミズム」とどう向き合っていくかが今後の日本が進むべき道を決める」と語った。寺島さんの講演要旨は次の通り。

◇ 今の日本は「何となくうまくやっている症候群」に陥っており、危機感が欠如している。すでに

「日本は埋没している」という前提で議論を進めなければならない。例えば、1988年、日本のGDP額は世界全体の16%を占めており、日本を除くアジアは合計で6%だった。これが2018年になると、日本は全体の6%で日本を除くアジアは23%になった。この傾向はこの5、6年で加速している。今の日本では実体経済が動いていないことに向き合

わなければならない。

現場力の劣化

日本のものづくりを支えてきた現場力が劣化している。19年にロシアであった「技能国際五輪」(隔年開催)で日本の金メダル獲得数は2個で7位。17年の9位よりは上

データを支配

なぜ、日本からGAF Aのような企業が生まれなかったのか。GAF Aの考え方は「データリス

ム」だ。消費者の購入商

品、属性などのデータを握ることで、すべてを支配し、あらゆる業界に参入している。フェイスブックが仮想通貨「リブラ」の導入を自論むのはその象徴。リブラに各国が反対したように、今後、GAF Aと国家の綱

引きは正念場を迎える。その中で業態や会社の規模に関係なく、データリスムに対する経営トップのセンスが問われている。ビッグデータやAI(人工知能)の時代の中でどう戦略を立てるかが企業の明暗を分けることになる。

アジアと向き合う

今後のキーワードとして「アジアダイナミズム」を挙げたい。20年後、日本を除くアジアのGDPは日本の10倍にな

るだろう。今、日本と韓国は大きくしゃくした関係だが、いかにアジアを柔らかに吸収できるかが大切だ。日本では天皇を「国家元首」にしようという憲法改正の動きがある。ナシヨナリストの中には「打倒韓国・中国」を声高に叫ぶ者がいるが、戦前のナシヨナリストとの違いはアジアを見ているか、共鳴しているかだ。「元首天皇」にアジアが共鳴するであろうか。中国の突き上げにいら立ち、戦前のような「日本チャチャチャ」の泥沼にはまらぬよう、賢くならなければならない。

◇ 勁草塾では講演会、勉強などを定期的開催。詳細はサイト(https://keisoujuku.jp/)を